

東京学芸大学全国同意会機関誌

2011年

第8号



辟
雍

HEKIYOU



特集 東日本大震災

辟雍8号 目次

会長挨拶 二つの道の選択 ― 9・11と3・11 ― 鷺山恭彦……………3	
東日本大震災特集	
何が起きたのか、何をすべきか、何ができるのか。	
①その時学校では	
岩手県北上市・江釣子中学校・古館裕之教諭に聞く	
聞き手 鷺山恭彦……………4	
②青森からの報告 青森も被災地 それでも被災者受け入れ地に	
青森支部幹事長 矢野政弦氏……………8	
③仙台での体験 メルシヤン 東日本営業課長・鈴木康孝氏……………10	
④岩手からの報告 岩手県紫波郡紫波町・五日市稔氏……………12	
支部、続々誕生 岡山、鳥取、静岡、新潟で	
設立及び活動報告……………14	
各部の活動報告	
事業部 組織部、総務部、会計部、広報部……………22	
理事会報告……………24	
ホームページのご案内……………28	
あとがき……………28	
ホームカミングデーのご案内……………29	



会長挨拶

二つの道の選択

— 9・11と3・11 —

辟雍会会長 鷺山恭彦

この3月の東日本大震災と原発事故は、私たちの在り方そのものを震撼させた。現地からの報道に為すすべもなく立ちすくむ毎日で、辟雍会としてできたことといえば、幾ばくかの義捐金とチャリティーコンサートぐらいであり、卒業生の把握もままならず、被災地の現実との落差に苛立ちと大きな無力感に襲われた。今回の大震災は、私たちの生き方、組織の在り方、そして存在様式そのものの根本的な検討を促している。

9・11の10年後に3・11は起きた。9・11は、イラク攻撃やアフガニスタン問題を惹起した。3・11は、人々の間に大きな連帯の輪を生み出した。その意味するところは対照的かつ象徴的といつてよい。後世の歴史家は、この二つを21世紀の在り方を決定づけた事件として位置づけるだろう。

かたや、歴史は浅いけれども世界史上最大の帝国主義国に成り上がった国に起きた事件であり、かたや、和を以って貴しとなす聖徳太子の17条憲法や刀狩以来の戦争放棄の憲法をもった国に起こった事故である。一方は、暴に対して、暴で以って応えた。もう一方は、自然の猛威と人知の暴走に対して、きずなど知恵で応えようとしている。

霸道か、人道か。バランス・オブ・パワーの支配する国際政治のリアリズムのなかで、常に問われる課題である。そして私たちの前に、21世紀における二つの道の選択として、この課題は鋭く提起されている。

本学の硬式野球部OB会報は『きずな』である。会長だった長谷昭先生は、人と人が豊かな関係を結ぶことの大切さを常に説かれて



いた。昨年他界されたが、秋霜烈日を刻んだ、その温顔が浮かぶ。きずなを大切にする野球部卒業生の助力で、岡山辟雍会は立ち上がった。これから広島、香川、群馬でもご協力をいただこうと思っている。

各県に足を運ぶと、卒業生の皆さんが実に魅力的な活動を献身的に展開しているのに出会う。そして支部ができたことで、卒業生相互の出会いの場が設けられたことを喜んで下さる。困ったとき、アイディアの欲しいとき、孤独におちいったとき、相談できる先輩がおり、力になる後輩がいることは、大きな活力源であり、人生の広がり方を変える。

数年前、ソウル市立大学に行ったとき、本学で学んだ学生や卒業生が集まった。そこには、夏休みに語学研修で4週間本学に学んだだけの学生も大勢参加して、学芸大は素晴らしかった、と口々に思い出話を語ってくれたのには驚いた。中国でも、清華大学、華東師範大学、南京師範大学などで活躍している卒業生たちから、集まりがあるといいですね、という声が届いている。このように卒業生が集まることで、私たちの大学の意味は二重三重に豊かになるし、新たに人と人との結びつきが生まれ、新しい活動を触発する。

地域に根差した教育と文化、日本に基盤をおく教育と文化、世界各国における教育と文化、この三つの層が交流しあう、新しい教育と文化の時代を迎えている。

大震災を契機に、人と人、物と物、文化と文化の交流の新しい在り方の模索が始まっているのではないだろうか。私たち辟雍会も、微力ながら、世界史における二つの道の選択のうちの、よりまっとうな道を自覚して追求していきたいと思う。

何が起こったのか、何をすべきか、何ができるのか。

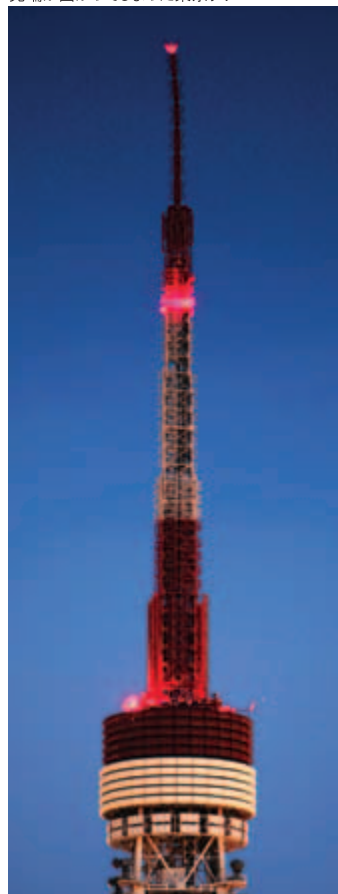


内陸に乗り上げた大型船

海上をさまよう軒の家



先端が曲がってしまった東京タワー



2011年（平成23年）は、日本の歴史にとつて未曾有のことが発生した。言うまでもなく「東日本大震災」である。20世紀以降、この地球上で起った地震の中で、5本の指に入るといふ巨大なもので、その被害も想像を超える甚大さであった。とりわけ岩手、宮城、福島、福島の東北三県は、10メートルを超える巨大な津波が押し寄せて町や村を呑みこみ、流し去り、また福島では原子力発電所が、爆発によって放射能をまき散らすという、すさまじい事態をも招いた。辟雍会には東北出身の会員も多く、この震災の被害に遭われた方々も少なくない。そこで辟雍会は、下記のような宣言を発するとともに救援活動も行い、さらに震災の実態を報告すべく、現地からのレポートを頂いた。ここにそれを再録したい。

辟雍会ホームページに掲載されたメッセージ

東日本大震災に辟雍会も立ち向かいます

未曾有の大災害が発生しました。マグニチュード9.0という、20世紀以降、地球上で4度しか起きていない巨大地震とそれに伴う大津波…、加えて原子力発電所の機能停止による放射線被害——。地震国に住む日本人としても未だ嘗てない大災害です。千年に一度の巨大地震、という学者の発言も伝えられました。その大災害の被災者、被災地に対して日本全国はもとより、世界各国から支援の手が差し伸べられています。日本人の復興への熱意とした、たくましい立ちあがり方に世界各地から賞賛の声も寄せられています。もちろんいまだかつてない不幸の極みの災期ですが、ここからどう立ち直るか、まさに人間力が問われている、といういい方ができるかもしれません。

東京学芸大生にも家族や縁者、あるいは本人自身が被災したという方も居られるでしょう。ここに「辟雍会出身県別会員数」というデータがあります。2004（平成16）年の発足以来、7年間の数字です。それによると、今回被害の著しかった東北・関東の各県別の会員数では 青森121人、岩手90人、宮城88人、福島155人、茨城233人、千葉236人の会員がいる、となっています。この方たちの被災状況は詳らかではありませんが、支援の手を待っていることは間違いないはずです。辟雍会も今こそ、その存在理由を問われる時です。力の限りの行動を起こしていきたいと思っております。

東日本大震災特集

1 岩手・北上市の古館裕之さんの報告

最初に登場していただくのは岩手県北上市の江釣子中学校・古館裕之先生です。古館先生は、大震災から約40日後の4月23日（土）、所用で上京された折り、辟雍会の事務所に立ち寄ってくださいました。その機会に、鷲山恭彦会長がインタビューし、岩手県の被災状況、古館氏の体験などをつぶさに語っていただきました。その報告は次の通りです。

地震発生時の学校の様子

鷲山 今朝、池袋に着かれたのですね。

古館 新幹線はまだ全面開通していないので、深夜バスを使ってきました。昨夜22時30分に北上市を出ましたが、高速道路はデコボコで、バスはガタガタと揺れに揺れて、とても寝られる状況ではありませんでした。

鷲山 3月11日は、学校におられたのですか。

古館 ええ。卒業式の前日なので、午前授業は終わり、生徒は帰宅していました。職員室にいて、緊急地震速報で「宮城県沖にて地震」と入ったので、すぐにテレビをつけました。直後に地震が来て、すさまじい揺れに襲われました。

最初は、職員室におりましたが、危険ということ、屋外にでました。

揺れがおさまり、職員室に戻ると、すっかり本棚の本は落ちて、停電になっていました。

鷲山 学校の被災状況は。

古館 甚大と言うほどではないですが、それなりに被災していました。近所の生徒たちが驚いて学校に駆けつけてくれました。帰宅の許可があり、自宅に帰ったのですが、停電で信号は働かず、帰りの道々大変危険でした。当然、家も停電。ものは散乱。幸いにも私の家族は無事と連絡が取れましたが。

日が暮れて、暖房機器も使えないため、寒くなる一方でした。やれることは携帯のワンゼグを見るだけ。見ていると電池もなくなるので、寝るしかないのですが、何度も余震が起きました。

鷲山 翌日はどうでしたか。

古館 学校集合6時半ということでしたので、家ではガスだけは使えるので、暖めておじやを作り、食べて出発。

その日の卒業式は延期。ラジオや同僚の先生が自動車の電源からとったネットので、大津波の惨状が刻々入ってきて、息を吞みました。

いろいろな対応をして帰宅したのですが、途中のスーパーマーケットは、人一杯。ガソリンスタンドは、停電のため多くは休止でした。営業している所は、ものすごく並んでいました。帰宅しても停電でテレビはつかないし、寒い。結局、電気が通じた9時近くまで、布団にくるまっておりました。

鷲山さんは東京でどうだったのですか。

卒業式を延期

鷲山 九段会館の二階で、教職大学院評価機構の会議をやっていました。普段

各写真はイメージです

と違う大きな揺れが続きました。一階では専門学校の卒業式をやっており、天井が落ちて死傷者が出ました。会議を中止して下に降りると、駐車場には負傷者が多数寝かされていました。

帰宅難民になってしまいましたが、おっしやるようにスーパーマーケットでは何もなくなり、道路は車で身動きできない状況でした。これでは怪我人がたくさん出た場合に病院に運ばせんから、東京で大地震が起こったらどんな惨状になるかと思いました。

学校が無事だったのは何よりでしたね。

古館 さすがに3月12日の卒業式は延期しましたが、結局おかげさまで3月15日に卒業式を行うことができました。余震がいつ起きるか、ドキドキの式でした。

鷺山 北上市からは、津波の被災地に駆けつけた人も沢山おられるのでしよう。

古館 大槌町に家族が住んでいる人の話ですが、とにかく車を走らせ、現地に着いたものの、連絡が取れず、避難場所を幾つか必死に巡り、涙の再会だったといえます。内陸部の自分の家に連れてきたとのこと。

津波の第一波はさほどではなかったようですが、第二波は強力で、家の中の相当な高さまで水が入ってきて、溺れながらも数十センチ残った空間で辛うじて息をして、波が引くのを待って逃げたそうです。

同様な話は、宮古市に行った人からも聴きました。

鷺山 被災地への支援活動が広がっています。

古館 支援の輪が広がりつつあるのを見るにつけても、感謝の気持ちでいっぱいになります。「阪神淡路大震災」の際に被災した神戸の皆さんからの応援は、非常に心を打たれます。

昨日テレビで見た、中学生が必死になって、声を張り上げ、義捐金を募る姿は、本当にありがたく思います。

鷺山 本学の学生たちも、学内や国分寺の駅頭で募金活動をしていました。また、教育支援ボランティアとして、都内に避難してきた児童生徒たちの勉強を助けに行ったりしています。

東京の港区の御成門中学校に勤めている、辟雍会の活動にも積極的な卒業生の岡本和隆さんからは、「生徒たちの募金

活動が新聞で紹介されました」と記事が送られてきました。人と人との絆を実感しますし、それをもつて学ぶ時ですね。

古館 神戸の中学生が「自分たちは、震災を直接知らないが、その時に多くの人々が神戸のために温かい手をさしのべてくれたと聴いている。役に立つことをしたい」と語っているのを聞いたりすると、胸があつくなり、日本の心と復興への力強さを感じます。

鷺山 先日、本学の技術科の名誉教授の池本洋一先生から「僕の教え子が釜石市で校長をしている。励ましてくれ」と電話をいただきました。

池本先生は、郷里の鳥取に帰られて琴浦町で宮司をされており、90歳なのに闊達と活躍されておられますが、そう言われまして、釜石市の甲子中学校に電話しました。菅原正弘先生です。ご存知ですか。

古館 菅原先生はよく存じあげています。私の中学校の時の技術の先生であり、ご指導いただきました。同じ北上市内の学校で勤務していた数年前に再会しました。震災の後に電話でもお話ししました。

鷺山 菅原校長のお話ですと、甲子中学校は海岸から8キロ離れた住宅地にあり、地震発生時、校舎のガラスの破損とボイラーの破裂で天井から水が流れた程度の被害で、生徒は全員無事だったそうです。

しかし、家が津波で倒壊した職員が9人もおられ、両親を亡くされた方が2人おられる。菅原先生も知人を何人か亡くされたそうです。

家屋、家族、貴重な財産をなくされ、悔しい思いをされている方が本当にたくさんおられるという悲痛なお話でした。

同僚の家族も犠牲に

古館 私の学校の同僚もご家族を亡くされた方がおられます。本当に言葉ありません。

鷺山 国会議員の方で被災されたという記事を読みました。黄川田徹さんという方でしたが、陸前高田市にあった家も、事務所も流され、ご両親、奥様、ご子息を亡くされたという記事でした。こうした方が本当に大勢いらっしゃるのですね。

古館 陸前高田市では、市役所の職員の方たちも、3分の1は津波にのみこまれ、残った職員も、ほとんどが肉親や友人をなくされたといひます。

驚山 本当に辛いですね。そういう中で復興の手がかりをつかんでいかなければなりません。

菅原校長の話ですと、釜石市では、被災した児童生徒に対して多額の予算を計上し、制服・運動着・通学カバン・ズック・学用品などを購入しているそうです。また、県小中学校の校長会を中心に、学習に必要な物品を被害のなかった地域から集めて寄付をしている、あるいは、中学校体育連盟では、部活動の用具を集めて寄付をする、その他、教材会社をはじめ、多数の関係団体が支援をしてくれるので、「学習面では大丈夫」といっておられました。

古館 ええ、私たちも北上市では個々の学校ごとに、それこそ釜石の中学校とペアリングをして、支援しようとしています。

驚山 本学の留学生センターの先生から、「留学生たちが、被災した児童生徒を励ます手紙を書いたので、どうしたらいいか」と相談を受けていたところなの

で、菅原先生に「どこに、どう送ったらいいでしょうか」とお尋ねしたところ、「私のところは被災していないし、被災したところは、生徒が県内外の親戚や避難所に分かれて生活している。現在、連絡を取れない状況で、新年度の在籍数も決まっていないので、学校が成り立つかどうかの瀬戸際状況で、とても手紙を読める状況にない。ただけばお礼の返事をということになって、とても対応できない、ご好意は大変有難いが、今の時点ではちよつと」とおっしゃっていました。

古館 被災したところは、本当に戦争の跡のような状況におかれて、想像を絶しています。各学校からの支援、県からの支援がありますが、支援の的確性こそが最重要のポイントです。状況がこれほど厳しくなければ、手紙に文房具を入れてというのは、きつと喜ばれたでしょうが。

驚山 本当に厳しい状況ですね。

古館 私の北上市とちがつて、菅原先生の釜石市は、市内の低い地域はすべて津波の直接の被災地ですから、各学校は、ほとんどが避難場所になったそうです。とにかく可能な限り罹災した皆さんを受け入れなければなりません。

菅原先生の学校は、校庭はすべて自衛隊のテントと駐車場。教室2つは自衛隊の基地としての事務所。他の教室が避難所になっているそうです。

1ヶ月経って、避難場所を体育館に移すことができ、4月下旬にやつと入学式を玄関ホールでささやかに行えた、と聞かれています。

避難場所も自衛隊の駐屯も、いつまで続くか判らない状況のようです。

何から手をつけるか

驚山 菅原先生が強調されておられたのは、今最も必要とされているのは、国からの莫大な予算である、ということでした。市街地が破壊され、瓦礫の山ですから、瓦礫を撤去し、ライフラインをまづ復旧しなければならぬ。そして、住宅を建てること、雇用を考へることなどの住民の生活基盤を整えることがまず第一で、次が学校教育だ。

古館 生活基盤がしつかりして初めて学校が成り立つということをこれほど実感したことはありません。早急の復興が望まれますが、どんな状況でも通って行くところが学校の学校たる所以だろうとも思ひます。たゆまず生徒たちが学び続け



救援のために降り立った米軍ヘリコプター操縦士に抱きつく被災者



米軍兵士と力を合わせて使える家具を運び出す被災者

各写真はイメージです

ていること、教室で授業が出来ることが
いかに貴重で素晴らしいことか、改めて
実感しています。

鷺山 ところで、北上市は、小金井市
と縁が深いですね。

古館 今、北上市の桜の名所である「展
勝地」で、桜祭りが開かれています。

この「展勝地」の桜は、大正時代に小金
井から「小金井桜」として送られたもの
で、それらが北上で根付いて、「展勝地」
という名所になりました。
最近では、反対にその桜が小金井に里帰
りしているようです。

鷺山 今年の2月11日・12日・13日に、
『甦る！ 名勝小金井桜』という「桜の
まちづくりサミット」が小金井で開かれ
ました。その時に伊藤彬・北上市長のお
話を聞きました。

1921（大正10）年に、「展勝地」がで
きる時に、小金井山桜が1200本ほど
贈られて、展勝地や近くの村や町の神社
仏閣に植えられたそうですが、展勝地に
植えられた200本のうち、80本が、現
在、花を咲かせており、そこから採った
実から木を育てて、小金井市に里帰りを
図っているそうです。

古館 小金井桜は、江戸時代から有名で
したね。確か「小金井橋夕照」という広
重の錦絵があったと思います。

鷺山 そうでした。遥か富士山も見え
て、とても雰囲気のある錦絵ですね。こ
の玉川上水の桜は、ヤマザクラの多様な
天然変種の一大集植地として類がない、
ということ国「名勝」に指定され、

昭和30年代までは、小金井橋を中心に、
花見客で賑わったといえます。しかし、
その後放置されて雑木が繁茂し、桜は枯
れていきました。ここ15年でも200本
が枯れました。
このサミットを契機に、10年計画で6
キロの桜並木を復元する予定です。そ
こに北上市が大きく寄与して下さって
います。

古館 今回の大震災では、小金井市から
いち早く、支援の物資が北上市に来てお
り、北上市を通じて、沿岸の被災地に送
られたと聞いています。

鷺山 桜で結ばれた交流が、そうした
形ですぐに動き出して、うれしいですね。
今日は、早朝から私たちの事務所にお立
ち寄り下さり、いろいろな状況をお話し下
さって、ありがとうございました。

2 青森からの報告

青森も被災、それでも

他県の被災者受け入れ地に

辟雍会青森県支部 幹事長 矢野政弦

（昭和62年度D類保健体育卒）

この度の大震災にあたり、辟雍会ホー
ムページに同会理事会名により「大震
災に立ち向かいます」との心強いメッ
セージと、被災地・被災者への御心配
の言葉を頂きましたことに対しまして、
東北の一員として、この場をお借りし
てお礼を申し上げます。

報道等でご承知のことと存じます
が、青森県では岩手・宮城・福島県と
の比較では被害が小さかったものの、
主に太平洋側の八戸市・三沢市等にお
いて、死者・行方不明者あわせて4名、
また1300戸を超える住宅が全壊・
半壊の被害を受けました。（他三県に比
べて人的な被害が少なく済んだ要因
のひとつとして、海岸線のすぐ後背地
が高い丘状の地形であり、海岸付近に
住宅が少なかったことが挙げられてお
ります。）
幸い、会員の直接的な被害・被災の報
告はありませんでしたが、学校関係の被
害状況として、地震の後、数日間は主に
停電の影響により、多くの小・中・高等
学校が休校し、また、学校給食が提供で
きなくなったことから、春休みに入るま
で午前授業で対応した小・中学校があつ
たとの報告を受けております。

学校施設の被害としては、県内121
の学校（幼稚園・小・中・高等学校・特
別支援学校）において建物が一部損壊。
5月1日現在の状況として、福島・宮城・
岩手・茨城県などから合計で209名の
園児や児童・生徒が、県内の小・中・
高等学校に転入してきているとの報告・
報道がありました。

現在、県内の学校は表面上はほぼ通常の状態に戻っているようですが、震災で受けたショックによる子どもたちの心的障害等には、時間が経過してから症状が表面化するものがあることから、八戸市では相談窓口とカウンセラー（臨床心理士）によるケア体制を、しばらくの間継続するとの報道があり、震災の影響の深刻さの一端を感じております。

全国で2万人を超える方が犠牲（死亡・不明）となり、また、今なお10万人を超える方々が避難生活を強いられている状況の中で、時期尚早であり、私のような者が所感を述べることは誠におこがましいのですが、少しでも感じていることを書かせて頂きたいと思います。

おそらく日本の多くの人たちがそうであるように、被災地の惨状を知った日から「もしその場に居合わせていたら自分はどういった判断をし、どういった行動をとることができただろうか…」、また「今、自分にできることは何か…」といったことを考えます。日々、仕事などに追われ、ボランティアとして協力する余裕も無い自分にできることといっても「義援金・救済物資面での協力」や「節電」といった、小さなことしか考えつかない

わけですが、もうひとつ誰もができること、それは今回の震災を忘れないことだと思います

今回のような地震・津波がいつでも起こりうるということを忘れない。それに対する想定・準備をしておくことを忘れない。震災が起きた後はもちろん、その前からもさまざまな広報物等に「いざという時のために…」といった内容のことが紹介されています。

普段から非常用持出品を準備し、最寄の避難所を確認しておくこと。揺れを感じた時の「出口の確保」、「火の始末」や「身の安全を守る方法」。その後の「正しい情報の確認」と「避難所への速やかな移動」。家族等との連絡方法の確認……。

これらは、いつ起こるか分からないことに対する準備なので、どうしても後回しになり、また、面倒に感じてしまうこととありますが、家庭であれば家族全員が、職場であれば職員全員が、普段から継続的・習慣的に確認・訓練をしておくべきことであり、このことが、適切な判断・行動、ひいては命を守ることにつながるのだと思います。

強引な例えであり、災害とスポーツは一緒にできるものではないことは承知しておりますが、スポーツでも普段の練習でやっていないことを、試合でいきなりやれと言われてもできるわけが無いのと同じだと思うのです。

頭で考えたり、口で言うことは非常にたやすいことではありますが、「今回の震災を忘れずに、災害が起こることを想定した対応を準備・訓練しておくこと」。「今回の体験を、いつ起こるか分からない、次の機会への教訓とすること」。これが数少ない自分にできることのひとつ

つであり、犠牲となってしまった多くの方々に報いることである。これが私の思うところですよ。

最後になりますが、このたびの震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り致しますとともに、被災された皆さまとご家族に心よりお見舞いを申し上げます。そして、まだまだ困難な生活を強いられている皆さまのご健康と一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます、青森県支部からの報告とさせていただきます。



自作の国旗を背負うスペインのヒッチハイカー

各写真はイメージです

3 仙台での体験

メルシャン・東日本営業課長 鈴木康孝

仙台で大震災を体験した卒業生からも「体験記」が届きました。報告を寄せてくださったのは1993（平成5）年、国際文化教育課程を卒業された鈴木康孝さんです。鈴木さんは会社で仕事中に地震に見舞われました。仕事のこともさることながら、家族の安否を気遣って苛立つ様子や余震におびえる生活、目に入ってくる町の様子などが生々しく綴られています。

3月11日の震災当時、私は仙台市青葉区内の会社で内勤をしていた。

14時46分、ゆらっとしたかと思うと突如激しい横揺れが襲った。机の上の書類がすっ飛び、天井の石膏ボードがはがれて落ちてくる。女性社員の悲鳴。体験したことのない恐怖で机の下にもぐるが、もぐった机が右へ左へと動く。2分くらい揺れていたが、体感ではもっと長く感じた。揺れが収まり電気が消えたオフィスを見つめ呆然。

まず思ったのは家族の無事。妻は家にい

る時間。子供達は小学校だろう。携帯が通じない。安否がわからない不安と苛立ち。

近くの公園での集合避難で、震度6と聞かされた。強い余震が続く、近隣のオフィスビルが揺れているのが目視できる。その後、雪が降る中、徒歩で帰宅。道中、剥がれ落ちたビルのタイル、ショーウィンドーが全部割れたカーディーラー、2m歩いて歩道に出てきた自動販売機、割れた道路から噴出す水道水、等々、街の傷跡を見て、改めて揺れの大きさを実感した。

途中、妻から携帯にメールが届いた。美容院から濡れた頭のまま飛び出し、小学校へ子供達を迎えに行ったとのこと。ほっと一安心。通話は出来ないが、メールはタイムラグがあるものの使える様子。

帰りがけにコンビニでいくばくかの食料を購入。商品が散乱する真っ暗な店内で、携帯の電卓と懐中電灯で清算をしてくれたコンビニの店員さんに感謝。そしてまた、床の商品を穏やかに拾いながら、

整然と列を作るお客の態度にも、東北人の辛抱強さを感じた。

住居マンションへ18時30分頃到着。避難所となっていた1階エントランスロビーで家族と再会。なぜか私の送ったメールは届いておらず、家族にとっては「父、安否不明」となっていて、ちょっとした感動の再会劇に。

私の場合、このマンションのエントランスが避難所になっていた関係で、

住民の団結力や協力度合いが非常に高い状態であったため大変心強かった。衣服や布団、限られた食料を貸し借りしあい、互いに励ましあいながらその週末を過ごした。

ライフラインの復旧は、電気が2日後、水道が7日後、ガスが30日後。テレビで津波の映像を見て呆然とした。ラジオで聞いてはいたが、こんなことになっっているなんて……



瓦礫で埋まったコンビニエンスストア駐車場（福島県いわき市）

また、風呂に入れないことで精神が段々と病んでくる辛さを体験した。健全な精神は清潔な肉体に宿る、ということを知った。

4月21日、引越。このマンションをとっても気に入っていたのだが、外壁が崩落していて鉄骨が見え、枠がゆがんでドアや窓が閉まらない状態では落ち着いて暮らせないというのが実状。分譲で購入した方々は保険を使い修繕を模索しているが、借り上げ社宅の当方はやむなく転居

を選択した。こういった震災由来の賃貸物件転居というケースは、報道はされないで表には出ないが結構多く、近所で頻繁に見られた。そのため物件が非常に少なくなっていたが、沿岸部の家をなくした方を思えば、選ぶ贅沢など言っていない。

4月上旬に仕事の都合で石巻に行っ

た。沿岸部の状況は悲惨の一言。もし戦争の跡を見たとしたらおそらくこんな感じかと思う。テレビには映らないが、海水とヘドロが腐ったにおい、それらが乾いて舞い上がっているため妙に埃っぽい。そして、瓦礫の周辺を何かを探すようにうつむいて歩いている人たち……

震災後、いろいろなことを感じ、いろいろなことを思った。ただ、どうもうまく表現できない。メディアでさまざまな人々が今回の震災についていろいろ語っているの、正直、代弁してもらったような気持ちに

なってしまう。でもその一方で、この仙台にいて自分だけが感じたものもある。だが、その部分がうまく言えない。4月7日深夜の余震（といってもこれも震度6）で、揺れているさなか小学5年の息子は、玄関で私に抱きついていて、恐怖でガタガタと震える人間を抱きしめたのは初めてだ。多分うまく伝えられないのはそういう部分の話だと思う。



瓦礫を撤去する自衛隊のパワーショベル（福島県いわき市）

4 岩手からの報告

岩手県紫波郡紫波町 五日市 稔

（昭和46年B類数学卒）

岩手県から生々しい報告が届きました。報告を寄せてくださったのは、辟雍会立ち上げ以来、昨年まで理事を務められ、また辟雍会岩手県支部の設立に尽力された五日市稔さん（昭和46年B類数学卒）です。五日市さんは岩手県立盛岡工業高校などで教鞭を取られ、岩手県での教員生活は42年間に及んだといえます。その五日市さんが、あの日（3月11日）の体験やいろいろな考えたことを綴って下さいました。

被災地の現実がどのようなものであったかという報告はもとより、今後の課題は何かも深く考えておられます。

あの恐ろしい大震災から今日で丁度40日が経つ。死者・行方不明者合わせて27479人、避難所生活者132571人……一口に未曾有と言うには余りにも悲惨な数である。

私の住む紫波町（しわちよう）は、岩手の県都盛岡市の15km程南の内陸中央部

で、町の真ん中を北上川が流れ、農業畜産業を中心とした至って穏やかな町であるが、今回は、未だ嘗て経験したことのない、激しく永い揺れに見舞われ、年甲斐もなく狼狽を隠せなかった。

幸いにも地震で倒壊した家屋は無く、他の被害も微々たるもので、今のところ、被災地の吉里吉里から数十人の被災者が避難してきて、町の施設で生活しており、近隣に住む我々も出来るだけの事をしてあげたいと思っているところである。

教職経験42年中、通算16年を過ごした県立盛岡工業高校は、昨年度中に耐震補強工事を終えたばかりで、殆ど被害がなかったのは不幸中の幸いだった。

それにしても、地震の直後から毎日、新聞に目を通し、テレビのニュースやデータ放送に注目してきたが、目を追うに従って悪化の一途を辿る、耳を塞ぎたくなる被災者の声や、目を覆いたくなるような被災地の現状に、まさにこの世の地獄を見る想いだった。

私は今まで、色々な事件・事故が起る度に、愛すべき日本市民が「まさか此処でこんな事が起きるとは……」、「まさか此処までは津波は来ない……」等々と、本当の警告を念頭におかず、まるで危機意識の無い、貴方任せの、弛緩した感覚で居ることに、強い危機感と嫌悪感を抱いていた。政府も行政も、その様な市民の大勢の意識に乗った附託を受けているのだから、未曾有の災害に際して的確な対応が出来ないのは、ある意味で首相にばかり責任があるとは思えない。

とりわけ原発事故については、その思いが深い。今回の場合、諸外国の方が、その辺りの実情を良く承知して、しっかりと危機意識をもち、我国への組織的支援にしろ、自国民の国外退去にしろ、対応は迅速だった。

いっぽう被災された方々は、整然と且つ肅々と避難行動を取り、苦しい避難所生活に耐え、その中で早々に、目線を復興・復活に向けたのは、本当に立派だと思う。瓦礫の中から使えそうな物を探し、壊れた工場や傷ついた船を直しながら、一日も早い操業や出漁を開始しようとする姿は、神々しくさえ感じられた。

彼らの言葉によると、「自分たちは漁師だ。漁師は魚を捕ってなんぼのもの。女の子供・街の連中に食わせなきゃ」、「うちの工場の部品が無くて、町の工場が困っている。早くモノを送らなくちゃ」、「『うちは日本一の建築資材工場だ。仮設住宅の材料が大量に要るべえ』etc…彼ら自身も深く傷つき、親や子・縁者・友人も同様であろう中で、この力強さ。強者（ツワモノ）とは正に彼らのことかと深く感じいった。

幼稚園児、小中高校生、大学・専門学
校生の被災者自らも、昼は笑顔でのボランティア活動。しかし健気な彼らも夜になって独り涙を流すだろう。この災害が誰かの罪ならば、八つ裂きにしても飽き足らないほどである。

だが、大人達は自力で復興することを念頭に立ち上がり、子供達はその大人の後姿を見て必死に立ち上がろうとしている。そのためには、沢山の時間も、金も、物も必要になるに違いない。街やインフラの復興にかかる兆の金は、国家事業として国が担うべきだろうし、人々の日々の生活の末端までを意識して見通した億の金は、当該の自治体が中心になっ



て担うべきであろう。そして、国内をはじめ世界中から寄せられた「義援金」は、一部の例外を除けば億の桁とは異なるだろうが、それら一つ一つの浄財に込められた思いとメッセージは、億や兆にも負けない強い力で被災者を支えていこう。彼らはきつと、10年と経たずに、元通りの元氣を取り戻すことを確信している。

そこで、幸運にも被災を免れた読者諸氏諸兄に、是非とも御願いたしたいのは、東北の農業・工業・林業・水産業の産品を普段通りに、出来れば少し多く買ってほしいということだ。中には多少割高になる物もあるかも知れないが、スーパーやアンテナショップで品切れを起こすようなら、お客は大きな声で「何やってんだ!」と怒鳴りつけるぐらいの勢いでお願いしたい。

そうすることで、被災地での雇用の機会や生産意欲が増し、一家の働き手が元氣に仕事が出来るようになり、ひいては各々の家庭が活氣を取り戻し、街全体が活性化するという筋書きが考えられるからである。そうすると、ベテランが現場の復旧と整備をしながら生産活動をし、若者が工場を塞ぎ散らかした瓦礫を片づけながら、ベテランの仕事ぶりを盗

むという、とても良いコミュニケーションサイクルが出来事も期待される。つまり、東北地方の産品への需要の高まりが、復興に向けた大きな力になると思うのである。

カラ元氣を振り回しては見たものの、復興には氣の遠くなるような時間と労力と経費がかかるであろうことは、素人目にも明らかだ。だが、泣いていても、呆けていても事態は何も進展しない。視線を高く、腰を挙げ、汗まみれ泥まみれで働こう。そして復興完遂の暁には、生き残った者全員が太平洋岸に一列に並び、大声で「やったぞ!! ザマーミロ」と叫ぼう。

最後に、自らの危険を顧みず、命がけで被災者救助・復興支援に尽力頂いた多数のお名前を存じあげない自衛官・警察官・消防署員・医療関係者並びに官庁職員等の方々に對し、衷心より敬意と感謝の意を表し、併せてお亡くなりになった方々の御冥福を祈りつつ、粗稿を閉じさせて頂きます。



石巻の高台から被災地を見下ろす自衛隊員

各写真はイメージです

県支部が誕生。岡山、鳥取、静岡、新潟…

鷺山会長は、就任以来「支部活動の充実」を重要な活動方針に掲げてきた。今年度は3月の静岡支部設立を始め、岡山、鳥取、新潟などで次々と支部が設立された。ここでは、今年度に設立された各支部の設立の様子を報告してもらおう。

また、埼玉県、神奈川県、鹿児島県、大分県、山梨県、広島県、京都府などで設立の準備が進められている。

現在、支部が組織されているのは、北海道、青森、岩手、千葉、富山、石川、高知などで、これで11支部できたことになる。ご承知のように、東京学芸大学は、日本全国の全道府県から学生が集まっている。その事情からすると、辟雍会の支部の数はまだまだ、「発展途上」と言わざるを得ない。しかし、その歩みは着実に前に進んでいるといえる。



震災の犠牲者に黙祷を捧げる静岡支部の皆さん



東京学芸大学野球部・中四国OB大会

2001.8.17

以前はこのようなOB会も

支部活動報告

新たに4つの

日本の真ん中、静岡に支部誕生 Ⅱ 3月

辟雍会静岡県支部（静岡辟雍会）の発会式が、3月26日（土）、静岡市葵区の静岡県教育会館で盛大に行われました。就任以来、支部立ち上げに奔走してきた静岡出身の鷲山恭彦会長も列席する中、62人もの同窓生が駆け付け（事前の出席通知を大きく上回る数）、教育会館で最も大きな部屋にも入りきれないのでは、と思うほどの盛況でした。

会は支部発起人の一人、武藤葉子さん（後の役員選出で事務局長に就任）の司会で始まり、冒頭、東日本大震災の犠牲者に黙祷を捧げました。続いて鷲山会

長がお祝いの言葉を述べ、設立までの発起人の皆様の苦勞を労いました。続いて出席者全員が一言ずつ自己紹介をしました。卒業年次、出身学科、そして現在についての紹介です。大学になってからの2期生、昭和29年書道科卒という大先輩など50年以上前の卒業生も数人おられ、さらに2年前卒業という若手もいて、年齢層は実に多彩でした。また、今年和歌山に転勤になったが、この日のために和歌山から駆け付けたという人もいたり、職業も小中学校高校の教員から地元テレビ局の記者などまちまち。みんな一人ひとりの自己紹介に熱い視線を送り続けました。この自己紹介がこの日のハイライトで「みんなの自己紹介を聞いただけで今日来た甲斐があった」と感想を述べる人が相次ぎました。



静岡支部会長に選ばれた、遠藤亮平氏



遠藤会長が挨拶に立ち「東京学芸大学には全国的な同窓会がなかったところに辟雍会ができ、さらに日本の真ん中にあるわが静岡県にその支部ができたということは画期的なことです。さらに本日これほどたくさん仲間が集まってくださり、一人ひとり母校への思いを語ってくれたことはそれだけで、この会を作った意味があつたことです。これから楽しく、意義のある会にしていきたいと思います」と述べられました。

最後に鷺山会長が「記念公演」をしました。演目は「最近の教育を巡る動き」。様々な問題を抱える日本の教育の現状と今後について、レジュメを用意されての熱のこもった話でした。

式は予定を大幅にオーバーして午後4時過ぎに終わりましたが、それでも皆さん立ち去り難いのか、あちこちに人の輪ができて、にこやかな談笑が続いていました。

今後は静岡支部の活動報告などを随時ホームページなどで紹介して行きたいと思っています。

(報告・広報部)



岡山辟雍会が設立

「那須圭介さんの『尽力に感謝』

岡山県では十数年前より野球部の卒業生や保健体育科の卒業生で時々集まることがありました。そして、常にその中心におられたのが、故那須圭介さん(昭和49年度卒)でした。野球部のOB会の役員の方々が岡山にお越し下さり、初めて地方での交流会が開催されたのも、那須さんが中心となり働きかけられたことがきっかけでした。

那須さんとは、平成20年春、永遠のお別れをしなければならないことになりました。この場をお借りし、岡山辟雍会の先駆けをつくられたご功績に感謝し、改めてご冥福をお祈りいたします。

そのような集まりの中で、部活動も学科も関係なく東京学芸大学の輪を少しずつ広げていこうという話になり、2年前から東京学芸大学岡山県人会を開催しておりました。

今年は、辟雍会本部の呼びかけにこたえて、第4回の集まりを岡山辟雍会の設立総会にしようという機運の中、皆さん、1月29日、午後7時、岡山市の『花丸本舗アカバナ』に集まりました。

「高谷岡山市長が激励に駆けつける」

冒頭、岡山市長の高谷茂男さんが、激励に駆けつけて下さいました。高谷さんは、『おもちゃ王国』の社長をされていた時に、東京学芸大学と研究連携を結び、東京学芸大学の『子ども未来研究所』の立ち上げに尽力して下さいました。

「岡山県に東京学芸大の皆さんが結集する場が生まれて大変うれしい。岡山県の教育と文化のために大いに頑張ってほしい」と大きな期待を寄せられました。辟雍会本部からは鷺山恭彦会長と池田克紀事業部長が出席されました。





「会長に、竹内仁志さん」

最初に鷺山会長の設立に際しての挨拶の後、全員の拍手のもと、竹内会長によって「東京学芸大学岡山辟雍会」の設立が宣言されました。そして皆で、設立の喜びを分かち合いました。

会長以下の役員リストを挙げます。

会長 竹内仁志（昭和51年A類数学卒、岡山県立玉野光南高等学校）

副会長 福本茂信（昭和56年B類保体卒、岡山中学・高等学校）

川上 忠良（昭和57年B類保体卒、倉敷市立連島南中学校）

片山 哲也（昭和57年A類保体卒、岡山県立津山高等学校）

事務局長 宰相裕一（平成1年A類保体卒、金光学園中学・高等学校）

事務次長 藤井進（平成3年D類保体卒、岡山県立玉野光南高等学校）

「自己紹介など」

自己紹介と近況報告では、1人1分でも30分以上かかるものでしたが、それだけの皆さんのこれまでの歩みが語られました。

初めて参加された最長老の大熊宏さんは、1961（昭和36）年数学科を出た後、岡山の教員生活（東岡山工業高等学校）をされ、その後NEC（日本電気）に入社され、電話交換機の開発・製造に従事されたお話をされました。

一番若い武田りささんは、書道科を出たばかりで、非常勤をしながら教員を目指しておられます。何年か前に鷺山会長が学長の時、学生食堂で話したことがあったというエピソードなどを語られました。

川崎医療福祉大学の長尾憲樹さん、光城さんは、学生時代、二人ともドイツ語の平野具男先生のところに入り浸り、他の専攻の学生とも交わって、梁山泊のような学生生活の中で、語学を通じた広い教養教育の薫陶を受けたことを、懐かしく語っておられました。

岡山大学からは教育学の原祐一さんが参加され、教育現場の皆さんと豊かな交流と情報交換ができたことを大変喜んでおられました。

今、岡山で若手で頑張っている先生の



中には、ここに参加している恩師の先生に「学芸大がよいところだから行け」と勧められ、学芸大で充実した時を過ごして岡山に戻ってきた人も何人かおり、連綿と続く大学への思いを語りました。

「学芸大、そして、武蔵小金井——この言葉を聞いただけで、胸がときめき、沸き立つてくる」という発言もありました。まさに、心騒ぐ青春の地・東京学芸大学です。

最後は東京学芸大学の学生歌「若草もゆる」を全員で声高らかに歌い、閉会しました。

「二次会」

総会終了後、場所をホテルグランヴィア岡山のスカイラウンジ「アプローズ」に移し、二次会を開催しました。ここでも母校の話に花が咲き、東京学芸大学への郷愁の思いを語り合い、時間が経つのを忘れるほどでした。



「鳥取県同窓会」「鳥取辟雍会」として新しく出発

第22回「東京学芸大学鳥取同窓会」は、2月27日12時より、鳥取駅近くの白兔会館（公立学校共済施設）で開かれました。東京から鷺山恭彦会長、筒石賢昭組織部長が出席しました。

すでに20年以上の伝統をもつ同窓会であり、2年前の「第20回同窓会」の時には、長谷川貞夫前会長が来られ、当時の鷺山学長が記念講演をしたという歴史があります。今回、約40名の皆さんが集まりました。

「会長は引き続き小谷次雄さんに」

小谷次雄会長の開会の辞に続いて、鷺山会長が挨拶をし、伝統のある鳥取県同窓会の活動に敬意を表しました。そして現在、「辟雍会」が全国同窓校友会として各都道府県に支部を作った新しい発展を期していることを述べ、鳥取同窓会も、是非、辟雍会の一翼に参画していただきたい、と呼びかけました。

続いて筒石組織部長が、これまでの活動の報告と今後の組織拡大の方針を述べ、新潟、鹿児島、大分、山梨、神奈川、埼玉などで支部結成の動きが興っている現況を報告しました。

質問、議論の後、皆さんの総意として、鳥取県同窓会は団体として辟雍会に入ることが合意されました。

会長には、引き続き小谷さんが選ばれました。小谷さんは県中部の倉吉市にお住まいで、教育界で活躍された後、現在、「倉吉市成徳公民館」の館長をさ

れています。

副会長の神戸直樹さんは、県東部の鳥取市にお住まいで、県立高校の校長先生を退職後、作曲家・岡野貞一とゆかりの「わらべ館」の館長もされた方です。

もう一人の副会長の宇田雅史さんは、県西部の米子市にお住まいで、同様に校長先生を退職後、米子市のスポーツ施設の管理者等を歴任されました。

事務局長には武田基資が選ばれました。

鳥取辟雍会では、東部、西部、中部と年ごとに会場を持ち回りにして同窓会を開催しています。今回の会合は、東部が担当で岩美町にお住まいの飯野秀樹さんのご努力で実現しました。次回は西部地区で開催の予定です。



また、2年後の「25周年記念大会」は、特別に実行委員会を設けて開催することとし、実行委員長には小椋博幸さんが選ばれました。それまでに会員の掘り起こし、会員名簿の充実を目指します。

会はその後、出席者一人一人の自己紹介が行われ、卒業年度、所属、サークル活動、等々が、エピソードを交えながら語られ、いろいろな情報交換もなされました。

第一回同窓会から掲げられている伝統の横断幕は、美術科出身でプロのデザイナー・村岡昭巳さんの手による物です。

最高齢は、90歳になる本学技術科名誉教授の池本洋一先生で、現在、琴浦町で宮司を務めておられます。

鳥取県は作曲家岡野貞一の生まれたところで、高野辰之とのコンビで「ふるさと」や「春の小川」の名曲をつくったことで知られています。「わらべ館」は岡野貞一ほか、田村虎蔵、永井幸次と、その後に活躍した音楽家たちを紹介する記念館で、副会長の神戸先生はこの館長を務めておられました。筒石組織部長は、それに因んで尺八で、「おぼろ月夜」を吹いて下さいました。

途中にビンゴゲームもあり、最後に全体の集合写真を撮り、次回、2012年度に西部地区での再会を約して、15時30分に散会しました。

閉会后、時間の都合で出席できなかった小森邦雄さんが現れ、そこで小森さんと池本先生の案内で、鷺山会長、筒石組織部長は、鳥取砂丘の見学と渡辺美術館を参観しました。

特に渡辺美術館は、仏像、屏風、甲冑などの歴史的遺産が多くあり、日常的な用品も揃っている大変価値がある美術館で、大阪城合戦図や曾我十郎・五郎の仇討屏風など、教材としてうまく活用すれば、小中学校の歴史の学習に最適などところだなど、訪問した感想を伺いました。

（武田基資）



「智頭町、興雲寺住職」

吉田廉士さんを訪ねる

翌日、東京へ帰る途中、智頭で下車し、今回出席出来なかった吉田廉士さんを訪ねました。吉田さんは、長年、東京都の教員を務め、指導主事や校長として活躍されてきた方ですが、定年を前にして実家がある智頭町に帰りました。興雲寺の住職をされています。機関誌『辟雍』第4号（28〜29ページ2007年）には、吉田さんの郷里での活動が紹介されています。

智頭町は、鳥取県の東南に位置し、岡山県に接する県境の町です。林業（杉）で有名なところで、山に囲まれた、昔ながらの町並みがあつて、ゆったりと落ち着いた佇まいを今に残しています。

奥様の吉田一枝さんは、武蔵小金井のご出身で、東京の稲城市などで小学校の先生をされています。今、智頭町で活躍されています。お寺の仕事や、地域の様々な活動に



心を碎かれ、この地の歴史や文化がしっかりと残り、豊かに発展していくために大変大きな貢献をされています。奥様のガイドで、国の重要文化財である「石谷家住宅」を見学しました。

智頭町には、「米原家」があります。かつて、お兄さんが鳥取商工会議所の会頭、弟さんが共産党の国会議員だったというユニークなお家で、弟さんの娘が、同時通訳・エッセイストとして知られた米原万理さん、妹の由里さんは劇作家の井上ひさし夫人です。惜しいことに万理さんは他界されましたが、井上由里さんには、智頭町に来てもらって、講演会を開いたとのことでした。

また『青い山脈』『伊豆の踊り子』などを監督した西河克己の出身地でもある

り、西河監督の同級生の息子さんが「西河克己映画記念館」を開設し、昨年亡くなった西河監督のゆかりの作品のポスターを始め、業績が興味深く展示されていました。監督にまつわるいろいろなエピソードを聞くことが出来ました。

皆さんが、知恵と力を出し合つて、町の文化を向上させている姿を目の当たりにすることができました。そして、その活動の中心に吉田ご夫妻が健闘されている様子がよくわかり、卒業生の底力と郷里への想いの深さに大変感銘を受けました。

タイムスリップしたような町並みを歩く中で、鳥取の山間の町・智頭の文化・歴史の深さも体感できて、大変意義のある旅となりました。
(筒石賢昭)



辟雍会新潟支部「立ち上げ会」から

組織部長 筒石賢昭

猛暑の夏も終わりに近づいた8月28日（日）の15時過ぎより、新潟市信濃川近くの公立学校共済組合「新潟会館」カトリアの間で、東京学芸大学同窓会「辟雍会新潟県支部立ち上げ会」が行われた。出席者は17名で、本部からは鷺山会長と筒石組織部長が参加した。

会は、辟雍会新潟支部の当面の事務局担当で、今回の件で奔走して下さった



大勝直行氏による立ち上げ会の乾杯

教育委員会教職員課の木澤英二さん（昭和57年B類理科卒）の司会により、和やかな雰囲気の中で進められた。会の次第は、①開会のあいさつ ②鷺山辟雍会会長挨拶 ③筒石辟雍会組織部長の挨拶 ④懇親の宴（一人一人の近況報告）の流れで進められた。

開会の挨拶では、木澤英二さんから、これまでの新潟県の辟雍会新潟支部設立についての経過報告があった。これによると、過去、準備会が何回かにわたって開かれており、前会長の長谷川貞夫先生や副会長の柴田義晴先生、組織部長の神戸周先生も訪れており、こうした努力によって今回の立ち上げの会に至ったこと。支部の設立に必要な会員も充足しており、この会でもって辟雍会新潟県支部を立ち上げることが宣言された。

鷺山会長の挨拶では、会長が学芸大学に来る前、今から40年前に新潟大学教養部でドイツ語の講師をしており、新潟は第二の故郷であること。先ほども、昔そのままの駅、バス乗り場から遠回りをして、越後の情緒を感じながら古町や白山神社を通って会場に着いたこと。

新潟辟雍会の設立については、学長時代に村上市にお住まいの磯部正明先生と相談し、大勝先生を紹介いただき、その繋がりでも木澤先生とも連絡がとれるようになり、ご苦労いただいたこと。今日は、かつて担当だった新課程・欧米研究専攻の小澤玲子さん、ゼミ生だった音楽科の澤田茜さんなど、平成卒業の若い人たちも参加しており、これからの新潟辟雍会の活動に大いに期待したいことが述べられた。

引き続き筒石は、故郷が新潟県であり、実家も現在あるので、人一倍、当県には愛着がある、という挨拶の後、資料に基づいて、今までの各県の支部の立ち上げの状況について報告した。

各県で支部ができつつあり、情報交換、親睦交流の網の目が広がって、皆さんに喜ばれていること。新潟に続いて、広島、神奈川、埼玉、鹿児島、大分、山梨などを考えていきたいこと。知識基盤社会においては、励まし合って専門性をたかめ、豊かな人間関係のなかで生きることがますます重要になっており、充実した交わりのなかで頑張れるように組織拡大に努めることなどについて述べた。

そのあと楽しい宴会に入り、大勝直行氏（昭和52年A類保体卒）の乾杯の後、野崎明子、江部有美子、河内一美、中戸雅

博、塙佐敏、大滝里美、金田宏行、矢川栄一、高島純、川瀬貴志、加茂勇、澤田茜、小澤玲子、大勝直行、木澤英二の皆さんが、それぞれ学芸大学時代の思い出、授業のことや寮生活のこと、サークルや部活動のこと、教育実習のこと、現在の勤務状況がユーモアやエピソードを交えながら述べられた。

学生時代の自由で破天荒な生き方、夢や憧れ、挫折や刻苦奮励が、現在の大きな財産になっていることが如実に伺える、大変豊かな内容であった。

そして共通に言われたことは、これからの学芸大学に対する期待や激励であり、いずれも熱く伝わってきた。名残惜しい会であったが17時過ぎに散会した。



立ち上げ会の参加者

青森県支部 支部長 碓谷寿明

去る平成23年1月8日（土）、青森市内において平成22年度支部総会・懇親会を開催しました。

会員12名が出席。開会に先立って、昨年末に逝去された遠藤隆先生（昭和45年D類書道卒／当支部副幹事長）に黙祷を捧げ、「ご冥福をお祈り致しました。

総会では、「平成21年度決算・同22年度予算」や「役員改選」についての審議と「全国代表者会議」の報告などが行なわれ、また、総会に引き続いて開催された懇親会では、恒例の近況報告を行なうなど、終始和やかな雰囲気の中で、出席者の懇親を深めることが出来ました。

なお、今回の役員改選により、これから2年間の役員は以下のとおりとなりましたことを報告致します。

役職	氏名	卒業年	学科・専攻
顧問	三浦敬二郎	昭和28年	乙類英語
支部長	碓谷寿明	昭和43年	B類英語
副支部長	種市哲	昭和45年	C類保健体育
幹事長	對馬礼子	昭和46年	D類養護学校教育
幹事	矢野政弘	昭和63年	C類保健体育
	佐保美幸	昭和61年	B類数学
	高木徹	平成3年	A類数学
	猪股歳生	平成9年	D類数学
	宮重太一	平成11年	A類数学
事務局長	里村輝	平成10年	N類生涯スポーツ
会計監事	矢野朋子	平成2年	A類保健体育
	山本陽子	平成22年	B類書道

千葉県支部 事務局長 石井康雄

（昭和57年A類数学卒）（船橋市立海神小学校）

私たち千葉県支部は、故池田先生のご意向のもとで設立しましたまだフレッシュな支部です。従いまして、会員もわずかに9名です。船橋市を中心とした私の知りえる極一部の方々で組織した会です。県内各地には、同窓生が多数おられ、その方々のほとんどが教職についておられるのですが、現在では、県内の教職員名簿に出身大学が記載されませんので、なかなか動向がつかめないのが現状です。従いまして、大学を出たばかりの若い先生方の連絡・入会を心待ちにしている状況です。近年、千葉県では、かつて見られなかった退職者が大勢います。従いまして、新規採用者が多数います。こうした中で、若い世代の先生方を中心とした組織作りをしていきたいと思います。千葉には、千葉大学の

大きな同窓会組織があります。この組織では、先輩から後輩へと縦組織が出来上がっていて、組織で、千葉県の教育を支えています。そこで、本支部でもこうした組織作りをおこなって、全国に誇れる東京学芸大学同窓会千葉支部の活動を盛んにしていきたいと考えています。幅広い年齢層の組織にするためにも、多くの方々のご支援をいただきたいと思ひます。

船橋市は、大学まで片道2時間とはいえ、比較的足を運びやすい立地条件にありますので、これからも本部の活動を協力させていただきます。最後になりますが、本大学の更なる発展を祈念しています。

石川県支部 前会長 若林勝

東京学芸大学石川県人会が発足したのは、平成4年のことです。その後、平成17年に辞職会に加入し石川県支部となりましたが、いきさつは機関誌辞職第2号に掲載していただきましたので、重複はできるだけ避けて支部の様子を紹介したいと思ひます。

会員は平成21年4月現在で150名を超えています。支部発足当初は、同窓会名簿や各種職員録等で情報は豊富でしたが、個人情報保護条例施行後は同窓生の存在を知ることが難しくなり、新しい会員を増やすことは容易ではなくなってきました。それでも、諸々の機会に同窓の存在を知り会員は増えていきます。

教員が多いことはご多分にもれませんが、毎年総会の名目で行われている懇親会は、むしろ教員以外の方の参加が増えています。警察官や県・市職員の公務員、自営業、音楽家、ボランティア、会社員等いろんな職業の方で構成されているのが石川県支部の特徴と言えます。新しい卒業生だけでなく、県外にお住まいの方も歓迎します。例会は7月から8月に開催されますので帰省の際に御連絡下さい。

富山県支部

獅子の会 事務局 草野剛
（富山大学人間発達科学部附属小学校）

富山では毎年8月に、「獅子の会（辞職会富山県支部）総会」を開催しています。昭和50年頃に、親しい仲間数名の不定期な集まりだった会が、平成2年に名簿を作成して定期的に総会を開くようになって20年。名簿

搭載者はすでに250名あまりとなりました。大学の性格上、教員が多いのですが、一般企業の方もたくさんいらっしやいます。

会は簡単な総会に続いて懇親会を行います。小学校時代の恩師や、この会で親しくなった仲間との再会を懐かしみ、楽しい時を過ごしています。様々な方との話の中で、共通の友人がいたり、思わぬところで関係があったりと、新しい発見も多くあり、参加者のネットワークが一段と密になる楽しい会です。会の最後は、恒例の「若草もゆる」を肩を組みながら歌います。学生時代はもちろん、富山に戻ってきたからは、ほとんど歌う機会はないのですが、毎年1回、この会で歌うことで覚えてしまった方もいらっしやるようです。こうして、来年の再会を楽しみにしながら、会を開いています。

「獅子の会（辞職会富山県支部）」では、毎年、上記のような総会・懇親会を開催しております。初めは見ず知らずの方でも、同窓というだけで共通の話題があり、気軽に語り合うことのできる楽しい会です。学芸大学関係者で、富山県在住の方であれば誰でも参加できます。是非ご参加ください。また、富山県で教員採用試験を受ける学生の方も、是非お知らせ下さい。

岩手県支部 支部長 松尾和彦

東京学芸大学全国同窓会「辞職会」が設立されて2年ほど経過した頃、故池田義人先生に尻を叩かれて、14名程の会員に集まってく頂き、辞職会岩手県支部が誕生して早3年になりました。県内外の学大卒業生が様子が、なかなか掴めないで居ります。いきなり泣き言になつてしまつて申し訳ないのですが、東京都近郊やその他一部の道府県を除けば何処も大同小異ではないかと思ひます。ご承知のように「個人情報保護」の立場から、大学当局も各都道府県教育委員会もこれらの情報に関する問い合わせには殆ど門前払いの状態です。

そこで残る手立ては、「ネズミ購」ならぬ「辞職購」とりあえず現会員に依頼して、学大卒かも？と思われる人を紹介してもらい、連絡を取って辞職会の設立趣旨・・・云々・・・を説明し、名簿に記載することの了解を取って・・・と努力はしていますが、15打数ノーヒットという事も屢々です。

それでも仕事の合間を縫って、少しずつでも会員を確保（いや確認）していきますので、辞職会本部からも出来る限りの御助力とご援助を戴ければ幸いです。

島根県支部（設立準備中）事務局 玉林尚之（松江市立秋鹿小学校）

2年前に立ち上げの会合を開きました。すでに「退職されている方から30代の方までのメンバー」までが集まりました。初めて顔を合わす方ばかりで、緊張した面持ちで始まりましたが、辞職会でいただいた学芸大学のDVDが始まると次第に話が弾みました。世代は違つても、同窓というだけでこんなに親しく話せるものなのかと、学芸大学の存在の大きさを再認識した次第です。本当に、何とも言えぬ心温まる懇親会となりました。

島根県支部の登録者は、現在約40名。そのほとんどが40歳以上です。個人情報保護条例のおかげで、それより若い人の情報が手に入らない状況です。しかも、正会員が足りず、辞職会には未だに正式に承認されていません。これから課題は、若い人に入っていくこと、会員および現役学生への情報発信をして「縁」を広げていくことです。

島根出身の学生及びOBの皆さん、連絡待っています。だんだん。

高知県支部

会長 山岡和興（昭和38年甲理卒）

高知県で、最初の東京学芸大学同窓生の会合は、約20年位前に持ち、翌年に2回目の会合を持ったと記憶しています。以後は同窓生が集まることなく、暫く沈黙の状態でした。

本県の教職員名簿には、以前は年齢・出身大学として住所等も掲載され、名簿は非常に作り易い状態でした。現在これらの記載はなく、名簿は作りにくい状況です。

同窓会のことも忘れておりましたが、2007年6月に、鷺山恭彦学長・金沢育三辞職会副会長にご来高頂き、急遽同窓生15名が集まりました。同年12月に、とりあえず高知県支部を設立しました。同窓生の中には、辞職会の読み方や存在そのものを知らない者もいるようです。今後、幅広い年齢層の同窓生の集まり、そして、辞職会への加入を呼びかけていきたいと思っております。僻遠の地から母校の更なる発展を祈っております。

各部の活動報告

事業部

辟雍会初の現役生、卒業生交流イベント 「クロス」に200人が集合

去る2011年6月25日午後6時過ぎ、和太鼓サークル『結』の、梅雨空を吹き飛ばすような勇壮な演奏で、オープニング。鷺山恭彦辟雍会会長の「辟雍会が初めて開催する現役生と卒業生の交流イベントです。辟雍会の主旨にふさわしく、今宵は大いにクロスしてほしい」との挨拶と乾杯の音頭で、全員が元気にビールの入った紙コップを高々と掲げて、交流が始まりました。

会場にはアーティストや企業から高い評価を受けているDJ SAKUMA氏(SOUND PARK. TOKYO)＝DREAMS COME TRUE MIX CDを手がける＝が、参加した人たちの表情を瞬時につかみ、選び抜かれた音で、会場の和やかな雰囲気を出してくれました。

また、東京学芸大学ストリートダンスサークル「@fter Beer (アフタービアー)」出身で、現在、全国で活躍する

黄帝心仙人のパフォーマンス



パフォーマンス集団『Repoll:FX(リポール・FX)』が、このクロスを卒業生として盛り上げたいと、GUEST SHOWをしてくれました。

次第に会場の参加者は、彼らのエンターテイメントに酔いしれ、今まで会の流れで受身的にできていたクロスが、自ら動いて作るクロスへと立ち上がっていくダイナミックな動きが、至る所に生まれ始めました。

更に、日本だけでなく世界でパフォーマンスが認められ世界中に活躍の場を広

げる『黄帝心仙人(こうていせんにん)』が、その日、ソウルから帰国してそのまま、クロスに駆けつけてくれました。

年間様々なイベントに呼ばれる『黄帝心仙人』が、「学生と卒業生・社会人がこのような形で交流するイベントは今までに見たことがなく、実に新しく面白そうだ」とクロスの企画を絶賛し、無理なスケジュールの中、出演を承諾。世界が認めるだけあって、SHOWを見た人は非日常的な世界に引き込まれ、いつの間にか参加者から一体感まで感じられるようになりました。

ハイライトは、カードを使った出会いの演出でした。入場の時に会費と引き換えにランプのカードが渡されていますが、それぞれ同じ数字のカードを持った現役生と卒業生がカップルになるという趣向。もちろん二人はこの日初めての出会い、カードの取り持つ縁です。

先着の10組が呼ばれて自己紹介。卒業生はこの3年以内ぐらいに卒業したもので、小学校、中学校などの教員、一般企業社員、塾の経営者など多彩な顔ぶれ、現役生も専攻が幅広く、ほぼ全課程から集まったのではないかと思えるほどでした(もちろんこのカップルは男女ということではなく、あくまで現役生と卒業生。男×男、女×女の出会いも多数ありました)。この夕誕生した「カップル」は今後どのような展開になるのでしょうか。





生協大食堂での「クロス」交流会

ある卒業生からは、「職場の仕事は結構きつい。そんな時、このように青葉一杯のキャンパスに戻れて、ほんとと深呼吸ができる。後輩たちと混じって踊りを見たり、さりげなく話したりしていると、大きく心が広がるようで、とてもいい。来年もやるのだったら、是非来たい」と言っていました。

会の後、国分寺駅周辺で、この日「クロス」で出会った参加者同士が、三々五々集まっているのが目撃されたそうです。

事業部ではこの他①学生キャリア支援事業として、WORK語り合い、企業就職対策講座（「かち就」、「ブレイクする」、「卒業生との就活ランチミーティング」）など、会員支援事業として「無料法律相談」、「法律ゼミ」、「学生企画事業の支援」、ホームカミングデー支援事業、キャンパス環境充実研究支援事業などを行ってきました。

組織部

今年度の組織部の活動方針の柱は「組織拡大事業」です。その第一は「支部設立事業」ですが、15ページからの特集にあるように、岡山、島根、静岡、新潟で、新たに支部が設立されました。まだその活動は始まったばかりですが、各支部とも意気盛んに、今後の組織の充実発展を期しております。頼もしい限りです。さらに埼玉県、神奈川県、山梨県などの関東近県、遠く九州の鹿児島県、大分県、熊本県、そして広島県、京都府などでも支部設立の準備が着々と進んでおります。特集をお読みいただくと分かるように、全国には、辟雍会ができる前から

「県人会」のような形で、同窓生が集まる場が作られているところもあります。それはそれで結構なことなのですが、そうした既存の組織と辟雍会はどのような関係にあるのか、既存組織をそのまま支部にすることでいいのか、など微妙な問題が存在することも事実です。こうした問題をどう乗り越えるかも今後の課題の一つといえるでしょう。

二番目は「新入生未入会者および入学時に未加入卒業生への入会依頼」という活動です。辟雍会は新入生の入学手続き時に入会手続きをとってもらうという方式を設立以来ずっと取ってきました。この方式は一定の効果（効率面など）をあげてきたのですが、近年はその入会率が漸減してきている、という問題があります。入会率が下がるといことは、会の財政に直接響いてきます。

この入学時未入会者がそのまま卒業してしまふ、という事態にもなっています。さらに辟雍会設立以前の卒業生への入会呼びかけをどうするか、など組織の根源にかかわる問題に取り組んでいかなくてはなりません。今年度も鋭意努力をしてきたのですが、根本的解決にはとうてい至っておりません。

三、学生委員との交流事業、四、卒業生への配布物作成、という事業は今後の予定になるのですが、三の学生委員との交流は、二の組織拡大にとって重要な舞台ですので、できるだけ多くの学生員に集まってもらいたいと思っています。四の卒業生対策も組織拡大（問題解決への糸口）という意味でも重要と考えております。

総務部

総務部の今年度の活動の柱は次の五項目です。

1. 全国代表者会議、理事会、幹事会の開催
2. 東京学芸大学との連絡、調整の実施
3. 既存の卒業生組織等との連携業務の実施（総会、新年会等）
4. 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務の実施
5. 規程等の整備・見直しの実施

会計部

1. 予算の適正かつ効率的な執行
2. 的確な会計事務の実施

広報部

1. 機関誌「辟雍8号」の発刊
2. ホームページの管理と充実

理事会報告

日時 平成23年6月11日(土)

14時～16時20分

場所 東京学芸大学第一会議室

(本部棟3階)

出席者 鷲山恭彦(会長) 白木信子(副会長) 丹伊田敏(副会長) 山本一雄(副会長) 黒石陽子(副会長) 長谷川正(理事・東京学芸大副学長) 大槻秀明(理事・東京学芸大事務局長) 馬淵貞利(理事) 松村茂治(理事・副幹事長) 萱野政徳(理事) 種市哲(理事・青森支部) 山岡和興(理事・高知支部) 本間久則(総務部長・理事) 佐藤節夫(会計部長・理事) 遠藤満雄(広報部長・理事) 筒石賢昭(組織部長・理事) 池田克紀(事業部長・理事) 中橋美智子(監事) 手塚穰治(監事) 岡本靖正(顧問)

規約で「構成員の半数以上の出席をもって成立」とあり、27名の構成員のうち20名が出席、6名が委任状提出で、会議は成立。

鷲山恭彦会長の挨拶

本日は青森から種市先生、高知から山岡先生にご出席いただき、ありがとうございます。会長に就任して1年が経ちま

した。この間、同窓生をどう組織するか、卒業生に何をどう発信していくかを課題としてやってまいりました。

その成果として、まず、岡山、鳥取

静岡に新たに支部が設立されたことをご報告申し上げます。支部作りは大変ではありますが、今回スタートした3つの県の会員の皆さんからは、同窓生が集う場ができたことを大変喜んでおられました。また機関誌『辟雍』も、多彩な内容と魅力的なデザインで、充実したものができました。ホームページの発信も増えてきました。この路線を踏襲し、さらに充実した活動を展開していきたいと思っています。

在校生と卒業生をどう結び付けていくかも課題です。そこでこの6月25日に、「クロス」という新しい会を計画しています。これは在校生と卒業生との交流を目指すもので、200～300人の参加を予定しています。初めての試みで、どうなるか判りませんが、新しい試みを果敢にやって行くことが、道を開いていくことだと思っています。

本日の課題として、予算の縮減問題があります。新入生の辟雍会加入率が年々落ちてきており、これは不況などによる経済状態悪化も原因かと思いますが、そ

の重なり分を今年は思い切って予算をカットする方針で、活動スタイルの見直しも含めた提案になっています。ご審議をよろしくお願い致します。

長谷川正理事・副学長の挨拶

村松学長が出張のため出席できませんので、代わって私がご挨拶申し上げます。まず、このたびの東日本大震災に当っては本学の関係者にも被災した方がおられると思いますし、すべての被災者の方々にお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

本学としてもその支援の一端にと、募金活動をしたり、附属小学校ではランドセルを集めて被災地に送るなどの活動をしました。また学生の中には、被災地から子供だけで避難してきて、東京都江東区のスポーツ会館に収容されている子供たちの支援活動をした者もいますし、夏休みには現地に行きたいという者も多くあります。

今回の震災にあたって、卒業生のネットワークが非常に重要だと痛感いたしましたし、辟雍会の重要性が増してきていると思います。本日は活発な議論を期待しております。

岡本靖正顧問の挨拶

皆様、お久しぶりです。この度の震災、原発事故に関して、被災した方々に改めてお見舞い申し上げます。大学も様々な支援活動をされているという報告を聞いて安心したところです。また辟雍会も8年目を迎えるに当たり、会長も3代目となり、鷲山さんのもとで、支部組織も着実に固めておられるようで心強い限りです。発展を期待しております。

「議事」

(1) 役員の交代と選出について

会長より次の提案がされた。青木久二理事(総務部長)が定年退職となり、これまで幹事であった本間久則氏を後任理事・総務部長に、また監事である青木登氏が一身上の都合によって辞任を申し出ており、教員養成評価機構の手塚穰治氏を後任監事に委嘱したい。

東京学芸大学からの理事に変更があり、佐藤郡衛理事から大竹美登利理事に、局長の異動により牧山助友理事から大槻秀明理事に委嘱したい。任期は平成24年3月31日までである。

役員の選出については、会則第11条第2項により「理事会の議を経て会長が委嘱」とある。挙手により承認。

(2) 平成22年度事業報告及び辟雍会入会者総数一覧について

本間久則総務部長より、総務部、会計部、広報部、組織部、事業部の活動について報告がされた。

昨年度の事業で特徴的なこととして、ホームページの更新の頻度を高めたこと、学生委員交流会を45名の参加で行ったこと、岡山県、鳥取県、静岡県で支部が設立されたこと、企業就職対策講座「かち就」を組織的に取り組んだこと、『キャンパス周辺散策ガイド』の英訳版ができたこと、等々である。

辟雍会入会者総数は、22年度は学部847人、大学院等28人、合わせて960人が入会し、累計は7543人になった。

学部入学生の変化は、932人(2004年)、888人(2005年)、927人(2006年)、997人(2007年)、1011人(2008年)、924人(2009年)、847人(2010年)と推移している。22年度の入会率は、学部入学生は72.5%であった。対策が求められる。

(3) 平成22年度収支決算書

佐藤節夫会計部長より、以下の報告があった。収入額は2329万605

円(会費収入は1859万3千円、刊行物売上74万3705円、前期繰越395万318円など)。支出合計は2102万8575円(事業費は682万9021円で、会議費は49万4532円、事務費は559万9322円、積立金は昨年と同じ800万円)。定期預金は6836万618円。

(4) 平成22年度会計監査

中橋美智子監事より、本年5月13日に監査を実施。会計帳簿、預金通帳、財産目録、証拠書類などについては監査の結果、適正に執行されていることを報告。決算報告および監査結果報告を全会一致で承認された。

(5) 平成23年度事業計画について

各部長より次の方針が提案がされた。
総務部(本間久則総務部長) ①全国代表者会議、理事会、幹事会の開催
②大学との連絡調整の実施 ③社団法人の卒業生組織等との連携業務の実施 ④新規会員の入会手続き、名簿管理等の実施
⑤規定等の整備、見直しの実施。全国代表者会議は11月5日を予定。

会計部(佐藤節夫会計部長) ①予算の適正かつ効率的な執行 ②的確な会計事

務の実施。

広報部(遠藤満雄広報部長) ①機関誌の発行 ②ホームページの充実 ③予算が少なくなっている事情からどういう体裁、内容のものを作っていくか。

組織部(筒石賢昭組織部長) ①支部設立事業、埼玉、神奈川、新潟、鹿児島、大分、山梨、広島を予定。②新入生未入会者および入学時に未加入卒業生への入会依頼 ③学生委員との交流事業 ④卒業生への配布物作成。

事業部(池田克紀事業部長) ①学生のキャリア支援事業(「WORK語り合え」、企業就職対策講座「かち就」(10回)、「ブレイクする」(10回)、「卒業生との就活ランチミーティング」)。②会員支援事業(無料法律相談、法律ゼミ、会員交流プログラム「X(クロス)」、学生企画事業の支援)。X(クロス)に関しては、期日も迫っており(6月25日)、前倒しをして準備。③ホームカミングデーの支援事業。④キャンパス環境充実研究支援事業。この他大震災関連でボランティア活動。

【議論】

◎大震災のボランティア活動で辟雍会と連携を取るといえるのがある。大学は活動資金の調達に苦慮している。辟雍

会と一緒に学生の支援に期待。

◎企画は学生の間から出てくるのが望ましい。大学と連携はいいが、学生の自主的なボランティアという立場でないといけない。

◎八戸、三沢などが被災した青森県からだが、ボランティアの申し出が多数寄せられたが、受け入れの問題で地元から「地元在住の方に限らせてもらいたい」という要請が出された。さまざまな配慮が必要。

◎「Imagaku」は、確かに講師の校長を何人をお願いするのが大変だが、続けていきたいので、復活を。

◎「かち就」は100人近く集まる。在校生と卒業生の連携もうまくいっている。オーガナイズする人間がしっかりしていれば成功する。今回初めて行う「クロス」もそういう形でやりたい。

◎「かち就」だけではなく「かち教」もあったはず。なぜ支援事業に入っていないのか。

◎同じ趣旨で始まった事業だが、「かち教」は学生キャリア支援センターの環境として大学の目玉商品。「かち就」は、大学で面倒を見ないというので、辟雍会が支援。

事業計画案は挙手多数で承認。

(6)平成23年度収支予算書

佐藤節夫会計部長より提案。予算編成の経緯であるが、2月23日の幹事会運営委員会において、各部から23年度の事業方針案の提出。予算総額をオーバーするうえに、今年度の収入見込みは昨年度よりも350万円ほど減少。各部の事業方針と予算の調整の必要。

5月20日の幹事会で審議したが、調整不可能で、会長と幹事長預りに。その後、会計、総務各部長も加わって予算案を作る。

積立金の800万円は確保する、予備費も総予算の1割程度は取っておくという基本方針で、各部の事業内容を検討。それを踏まえた予算案である。

会費収入の減少の理由は、本年から、「入学手続きが郵送でも受け付ける」ということになり、そこで辟雍会への入会勧誘もしているが、結果として昨年よりも174万円の会費収入減という結果に。

収入合計は2040万5030円で、昨年度に比べて343万1288円の減。

支出は、この収入合計に合わせて調整。事業費は昨年度に比べて273万1千円減の468万9千円。主なものは機関誌経費が昨年より80万円減の120万6千

円、ホームページ経費が21万円減の35万円、学生のキャリア支援事業費が61万円減の29万円。一方、組織拡大事業費は25万4千円増の154万3千円、会員支援事業費は7万円増の40万円、ホームページ経費は10万円増の50万円。重要と思われる事業は増額。

【議論】

◎積立金の目的は何か。教育会館を建てるための費用と聞いたことがあるが、この積立金はやがて大学に吸収されてしまうのではないか。目的のはっきりしない積立金を維持して、事業を縮小して行くというのでは本末転倒。事業ができなくなる。何のための同窓会かということになる。事業費は削らないで積立金の方を削るべき。

◎収入減を補うものとして、事業を行って収入源を確保することを考えるべき。

◎辟雍会は学生から取ったお金を食いつぶしていく形になっているのではないか。入会率は下がっても会員は増えていき、機関誌の部数も増えて行く。収入が減ったから2年以上の会員には機関誌を配らないというのは理屈に合わないし、2万円払って生涯会員となっているのに機関誌が届かないというのは納得できない。発送費など多くかかるので、

今の財政構造でいいのか、きちんと検討しなくてはいけない。

◎設立の当初、新入生から取った会費が、辟雍会活動の基盤になった。それは学生を食い物にしていたということではない。問題はその後の8年間、十分に卒業生を組織化せず、会員増を図らなかったことである。それをしない限り、確かに学生会員の会費の上にあぐらをかき、食い物にしているという批判は当る。だから、現在、支部設立を強く進めているし、私たちも、また各支部も、会員の拡大に努めて欲しい。

2万円で永久会員という制度は、長谷川会長時代に改め、2万円で20年、1年1千円の計算である。それにしても会費の徴収は、実際は大変な作業で、新しい財政構造を提示しても、そのとおりに動かないという問題がある。

支部の設立の過程でも、辟雍会会費を納めていたのは並大抵のことではない。支部の会費も必要、その上に辟雍会の会費も払うとなると、現役でも、年金生活でも、結構大変で、「上納金のようなものがあるのなら、支部は作らない」という話もでた。解決する方法は極めて明快で、入学時の徴収と卒業生への入会勧誘をどれだけ説得力豊かに徹底してやるかだけである。



◎入学のときに会費を取って機関誌を配ると約束しているのに、今回、機関誌の配布を制限するというのは問題がある。財政の問題が生じたので、8万2千部は必要なのに、6千部でやめました、届かない人もあります、というのは通用しない。少なくとも学生会員には全員にわたるようにしなくてはならない。

◎機関誌を送っても、1500部も返ってくることもある。機関誌に代わってホームページを充実させていく、情報はホームページにシフトさせていくという考え方を取りたい。メールマガジン方式

にすれば、必ず情報は届く。紙媒体は少なくなっていく。

◎考え方はわかるが、ホームページなどの電子媒体と紙媒体は媒体の意味が違う。紙媒体から電子媒体にシフトというが、問題はどんな内容のものを作っていくかである。紙媒体はいずれ消滅して行く運命かもしれないので、それぞれの機能を検討し、役割を明らかにして、対策を早く立てる必要がある。

◎電子媒体としてメールマガジンにしていけばいい。それには会員のメールアドレスが必要。アドレスの管理を専門的にやるというので、昨年、業者と検討したが維持に年間300万円もかかるというのでやめた。300万円払うなら郵送した方が安い。大学の協力で、メールマガジンを出せる体制に早く確立しないといけない。

◎大学は学生のアドレスを持っている。しかし個人情報問題があり、今後アドレスを集める際に、辟雍会も含めて使うというような了承を得る集め方が検討されても良いのではないか。辟雍会としてのアドレスの集め方を検討しなくてはならないのではないか。

◎社団法人の東京学芸大学同窓会は、明日の総会で法人化の問題を検討する。辟雍会の法人化の問題はどうなっているか。

長谷川前会長は「一般法人化を目指す」と言っていたが。

◎かつて議論したが、法律が変わる時で、結論は法人化しない方がよいという専門家の助言もあって、中間法人化の話は見送ったと聞いている。ただ、新しい法律がどうなっているのか、その点を研究する必要がある。

今年度は、機関誌の部数を8200部とすることで、収支予算案は承認された。

(7)支部の設置について

岡山支部、静岡支部、鳥取支部の規約が配られ、支部の設立を承認。

(8)会長候補推薦委員会委員の選出

本間総務部長から、会長の任期は2年と定められ、鷲山会長の任期は来年3月31日で終了となる。次期会長を選出しなくてはならない。会則には次期会長の選出は理事の互選で選ばれた推薦委員7名で推薦活動をするとなっている。原案を検討願いたい。

会長候補者推薦委員会委員（原案）

臼木信子副会長、丹伊田敏副会長、山本一雄副会長、黒石陽子副会長、長谷川正理事、筒石賢昭理事、金子義和幹事長
挙手にて承認。

(9)その他

一昨年、青森は支部の紹介事業として、小金井祭に参加したが、産地直送の産物を提供したりして、大変有意義であったが、いろいろ苦労した。最大の問題は小金井祭実行委員会との調整であった。今後、支部がこういう形で学園祭に参加することは重要であるので、参加がスムーズにいくように、支部が活動しやすいように辟雍会本部で十分対策を講じてほしい。

臼木信子副会長の閉会の挨拶

辟雍会はどう進んでいったらいいのか、今後の方向性を、きちんと決めて行かなくてはなりません。核心に触れる議論が行われ、大変有意義だったと思います。私は埼玉支部の設立を仰せつかったのですが、本日、岡山、鳥取、静岡などの前例が提示されましたので、それを参考にしてやっていきたいと思っています。

また社団法人同窓会は明日総会が行われ、重要な決定をしなくてはならないのですが、今後とも辟雍会との連携を図っていかなくてはならないと思っています。長時間ご苦勞様でした。盛会に終わり、厚くお礼申し上げます。





ホームページのご案内

すでにお気づきかもしれませんが、この「辟雍」8号に収載されている記事のほとんどはホームページ上で読むことができます。さらにホームページ独自の特集記事も満載されています。

印刷媒体が多くの費用と時間を必要とするの比べて、電子媒体のすばさは目を見張るものがあります。

会員の皆様には、どうか頻繁にアクセスしていただくとともに、皆様のホームページとしてご利用はもちろん、参加していただきたいと思います。

学内の動きはもとより、クラス会、サークルのOB・OG会の情報なども発信していきたいと思っています。どうか、皆様の情報交換の広場としていただきたいと思います。

へきようかい

検索



あとがき

あの日から約8カ月、東日本大震災の傷跡は癒えるどころか、ますます深まり広がっています。地震発生から1カ月後に現地を訪れた時も痛感したのですが、まさにとんでもないことが起こりました。人類最大の試練だとも思います。

私は東京学芸大学に入学以来、今日まで50年近く中央線沿線に住んでいます。中央線は甲武鉄道として開業したのが明治22年だそうですが、沿線が「発展」したのはあの関東大震災の後でした。手元にある「杉並文学地図」というのを眺めると、関東大震災の後、北原白秋、林芙美子、井伏鱒二、吉川英治、与謝野鉄幹・晶子など実に多くの文人が中央線沿線に引越してきました。地震の恐怖から逃れてのことでした。吉祥寺は野口雨情、三木露風、三鷹には山本有三、太宰治もいました。「震災の餘録」などとお気楽なことを言うつもりはありませんが、東日本大震災の体験が前向きに考えられる日の来ることを祈りたいと思います。

「辟雍」8号は、ずいぶん薄くなったなあ（中身もページ数も）とお感じになったかもしれません。ご案内の通り、印刷物はその發送経費も含めて大きな予算を必要とします。経費節減の影響です。辟雍会は設立から8年を経過して、会員も1万人を越えようとしています。会員との連絡媒体をどうするか、大検討を要する時期が来たようです。印刷媒体に代わって電子媒体であるホームページを上記のように充実させつつあります。ともあれ、大震災記念の機関誌をお届けいたします。（遠藤）



2011年 第13回 国立大学法人東京学芸大学

ホームカミングデー

日程:2011年11月5日(土) 会場:芸術館(学芸の森ホール)

講演会「大江戸を語る 江戸の女性と子供たち」

時間:14時40分～16時15分 開場:14時00分



イメージ



講師 竹内 誠氏

昭和8年(1933年)
東京生まれ
東京教育大学 大学院
博士課程修了 文学博士

専攻: 江戸文化史・近世
都市史

略歴: 徳川林政史研究所
主任研究員・信州大学助教授
東京学芸大学教授・立正大学教授を経て、
現在、東京学芸大学名誉教授・東京都江戸東京博物
館館長・徳川林政史研究所所長・日本博物館協会
顧問などを務めるほか、NHK大河ドラマ・金曜時代
劇などの時代考証を担当した。

著書:「寛政改革の研究」(吉川弘文館)・「江戸社会
史の研究」(弘文堂)・「江戸と大坂」(小学館)・「元禄
人間模様」(角川書店)・「江戸の盛り場・考」(教育出版)・
「相撲の歴史」(日本相撲協会)・「江戸は美味しい」
(小学館)など多数。



イメージ



芸術館

主催

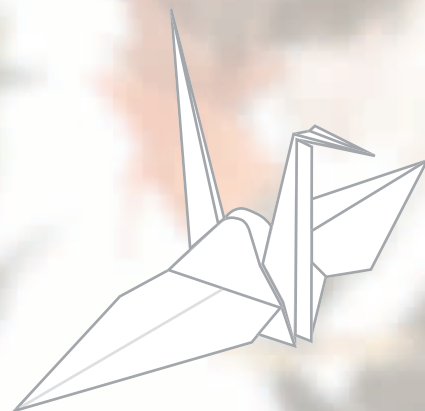
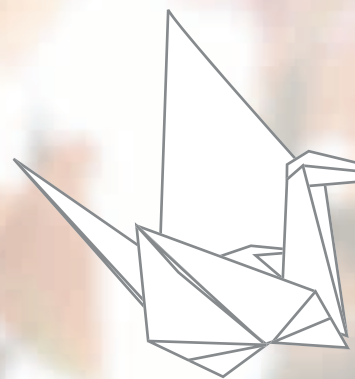
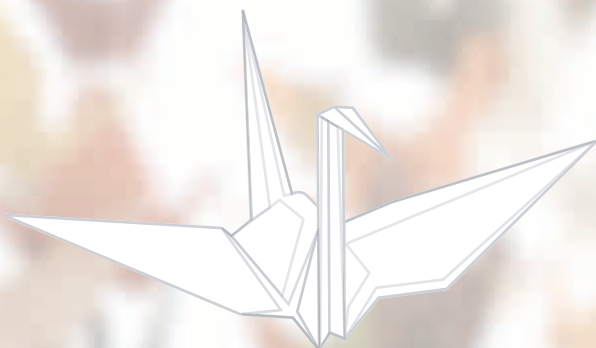


国立大学法人東京学芸大学



東京学芸大学
全国同窓会 辟雍会

お問い合わせ: 辟雍会 042-321-8820 dousou@u-gakugei.ac.jp



辟雍会 機関誌「辟雍」第8号

発行日 2011年（平成23年）11月5日

発行責任者 鷲山恭彦

編集 辟雍会広報部

事務所 〒184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 20周年記念飯島同窓会館内

電話・FAX 042-321-8820

ホームページ <http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/>

Email dousou@u-gakugei.ac.jp

印刷 株式会社 学校写真

〒274-0071 千葉県船橋市習志野 4-7-6

電話 047-493-9581